

大学と附属学校の連携による養護実習分析並びにICT教育コンテンツの作成と検証

荒川 雅子^{*1}・佐藤 牧子^{*2}・田岡 朋子^{*3}・丸田 文子^{*4}・倉澤 順子^{*5}・遠藤 真紀子^{*6}・
中谷 千恵子^{*7}・塚越 潤^{*8}・新川 夕貴^{*9}・武井 佑真^{*10}・大関 智子^{*11}・奥山 ゆりあ^{*12}

養護教育分野

(2019年6月19日受理)

ARAKAWA, M., SATO, M., TAOKA, T., MARUTA, A., KURASAWA, J., ENDO, M., NAKATANI, C., TSUKAKOSHI, J., NIIKAWA, Y., TAKEI, Y., OZEKI, T. and OKUYAMA, Y.: Analysis of *Yogo* Practical Training and Creation and Verification of ICT Education Contents through Cooperation of University and Affiliated Schools. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Division of Arts and Sports Sciences., 71: 173-181. (2019) ISSN 2434-9399

Abstract

This study was undertaken in cooperation with schools and kindergartens affiliated with Tokyo Gakugei University (hereinafter, the “affiliated schools”). The study analyzes *Yogo* practical training in the affiliated schools and develops and verifies teaching materials to be used in pre-training and post-training guidance for *Yogo* practical training. To prepare for the study, we ascertained the actual conditions of *Yogo* practical training for *Yogo* teachers and implemented an attitude survey of students and *Yogo* teachers during 2016 and 2017. Based on the results, a revised version of *Yogo* practical training diary and a practical training handbook (Surgery) were created. For the study, we performed a twofold investigation and analysis. The first was conducted with third-year undergraduate students who have received *Yogo* practical training. We analyzed the times and forms (lecture, observation, participation, and implementation) of practical training items specified in the *Yogo* practical training diary that the students received. The second was conducted with second-year undergraduate students. Digital teaching materials based on the practical training handbook were used in preliminary guidance for *Yogo* practical training assisted by educational SNS. We implemented a questionnaire survey and analyzed the effects of materials using text mining techniques. Results revealed that *Yogo* practical training becomes more practical in terms of its form and content, from lecture to observation, participation, and implementation gradually during the first week to the third week. In addition, as a result of introducing digital teaching materials into students’ lessons, students become more aware of *Yogo* practical training. The need for “understanding of children,” “assessment,” and “knowledge” was also recognized as learning until the time of practical training. Furthermore, the usefulness of digital teaching materials and educational SNS in using the materials was verified. These analyses

-
- * 1 東京学芸大学 養護教育講座 養護教育分野 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)
 - * 2 東京学芸大学附属 小金井小学校 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)
 - * 3 東京学芸大学附属 竹早小学校 (112-0002 文京区小石川 4-2-1)
 - * 4 東京学芸大学附属 世田谷小学校 (158-0081 世田谷区深沢 4-10-1)
 - * 5 東京学芸大学附属 大泉小学校 (178-0063 練馬区東大泉 5-22-1)
 - * 6 東京学芸大学附属 世田谷中学校 (158-0081 世田谷区深沢 4-3-1)
 - * 7 東京学芸大学附属 小金井中学校 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)
 - * 8 東京学芸大学附属 竹早中学校 (112-0002 文京区小石川 4-2-1)
 - * 9 東京学芸大学附属 国際中等教育学校 (178-0063 練馬区東大泉 5-22-1)
 - * 10 東京学芸大学附属 高等学校 (154-0002 世田谷区下馬 4-1-5)
 - * 11 東京学芸大学附属 特別支援学校 (203-0004 東久留米市氷川台 1-6-1)
 - * 12 東京学芸大学附属 幼稚園竹早園舎 (112-0002 文京区小石川 4-2-1)

revealed the following challenges: Guidance of the learning method using educational SNS was insufficient; moreover, literacy of ICT equipment use must be improved. This study was conducted as part of Tokyo Gakugei University Special Development Project.

Keywords: Yogo practical training, practical training handbook, digital teaching materials

Department of School Health Care and Health Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本研究の目的は、東京学芸大学附属学校園（以下附属学校）と連携し、附属学校における養護実習の分析と、養護実習前後の指導に用いる教材開発とその検証である。この研究を行うにあたり、2016-2017年に、養護実習の指導養護教諭を対象とした養護実習の実態把握と、学生及び指導養護教諭の意識調査を実施し、その結果をもとに改訂版養護実習日誌、並びに実習ハンドブック（外科編）を作成した。本研究では、以下の2つの調査と分析を行った。1つ目は、養護実習を受けた学部3年生を対象に、養護実習日誌に明記されている実習項目を受けた時期とその形態（講話、観察見学、参加、実施）の分析である。2つ目は、学部2年生を対象に、養護実習の事前指導で実習ハンドブックを基にしたデジタル教材を、教育SNSを用いて使用し、その効果について質問紙調査を実施し、テキストマイニングによる分析を行った。その結果、養護実習は、1週目から3週目までの間に講話から、観察、参加、実施へと、徐々に実践的な形態の実習内容となることが明らかになった。また、デジタル教材を学生の授業に取り入れた結果、学生の養護実習への意識が高まったとともに、実習までの学びとして「子供理解」「アセスメント」「知識」の必要性が認識された。加えてデジタル教材とそれを活用するための教育SNSの有用性が明らかとなった。課題としては、教育SNSを用いた学習方法の指導が不十分であったこと、ICT機器使用のリテラシーも高めていく必要があることが明らかになった。なお、本研究は東京学芸大学特別開発プロジェクトの一環として行われたものである。

1. はじめに

課題が多様化、複雑化する現代の教育現場において、教員は教職に就いたその日から、学校という公的組織の一員として実践的任務にあたるため、実践的指導力や学校現場が抱える課題への対応力を十分に身に付けるよう求められている¹⁾。しかし、初任者がそのような実践的指導力や対応力を十分に身に付けていない等の批判を受け、教員養成の段階における全国的な水準の確保が急務となった。そのため、質的水準に寄与する指針（コアカリキュラム）の作成の必要性が平成27年の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」において挙げられた²⁾。この答申を受け、「教職課程コアカリキュラム」が平成29年に示され、教育実習についての指針が出された¹⁾。しかし、その中には、養護実習の指針は示されていない。

また、本学では、教育実習ならびに養護実習のカリキュラムが改定された。改定前は基礎実習・応用実習と2回の実習の機会があったが、改定後は基礎実習に当たる実地研究Ⅰのみの履修で卒業することが可能となった。そのため、東京学芸大学附属学校園（以下附属学校）で行う実地研究Ⅰの経験しかない学生が教職に就くことも可能となった。こうしたことを踏まえ、

本学養護教育講座では、多くの卒業生が実際に就く小学校での実習を実地研究Ⅰで行えるよう、実地研究Ⅰの実習校を附属中学校・附属高等学校から、附属小学校・附属中学校へと変更した。

また、この研究を行うにあたり、2016-2017年に特別開発プロジェクトの一環で、養護実習の実態把握と学生及び受け入れる養護教諭の意識調査を実施し、その結果をもとに改訂版養護実習日誌、ならびに実習ハンドブック（外科編）を作成した。

平成27年の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」では、新たな教育課題に対応した養成の課題として、ICTを用いた指導法について言及した³⁾。ICTを用いた指導法については、教員が授業のどの場面でのどのような教材を提示すれば児童生徒の関心意欲を引き出したり、理解を促したりしやすいかという観点や、児童生徒が学習の道具や環境として適切にICTを用いて学習を進めることを教員が促す観点を含めて、授業力の育成を図る必要がある³⁾と、教員が授業等で活用することを念頭ににおいた方向性について述べているが、保健教育におけるICTを用いた指導法や、子供が健康課題への関心を高めるための環境整備も必要であり、養護教諭にとってもICTの活用は教員と同様の課題でもある。そのため、作成した実習ハンドブックを、ICTを活用し

たデジタル教材として授業で使用することで、これからの養護教諭に必要なスキルを学生が獲得する機会とすることが可能である。

このように養護実習をめぐる環境の変化により、大学と附属学校が連携を密にした養護実習を行う必要性と、養護実習の事前と事後の大学での学びを充実させるための教材や指導法についての検証が必要である。

そこで、本研究では、養護実習と、その前後の養成段階での学びの充実のため、①附属学校における養護実習内容の分析（以下養護実習分析）と、②養護実習前の指導に用いる教材開発とその検証（以下教材開発）を目的とし、本研究を実施した。

2. 研究の対象と方法

2. 1 対象

2. 1. 1 養護実習分析

平成30年度養護実習（実地研究Ⅰ）受け入れ附属学校4校で実習を受けた学生10名（学部3年生）

2. 1. 2 教材開発

「授業観察演習」受講者12名（学部2年生）

2. 2 調査期間

2. 2. 1 養護実習分析

2018年9月（実地研究Ⅰ実施期間）

2. 2. 2 教材開発

2018年9月（授業観察演習実施期間）

2. 3 調査方法

2. 3. 1 養護実習分析

本学が使用している実習日誌内に記載されている実習項目64項目について、実習生が、いつ（受けた月日）、どのような形態（講話、観察見学、参加、実施）で受けたか、一覧表に記入し、分析対象とした（表1）。講話は、校長などの管理職や、担当教職員より講話を受けたこと、観察見学は、授業や行事等の観察や見学を行ったこと、参加は、授業や行事等に児童生徒と一緒に参加したこと、実施は、自分が主になり、授業や保健指導、1日保健室経営等の実習項目を行ったこととした。

2. 3. 2 教材開発

検証するための教材にあたって、昨年度までの特別開発プロジェクトで作成した実習ハンドブックを使用した。

実習ハンドブックは、具体的に実習中に起こりそうな事例について、学生がアセスメントと対応を考えワークシートに記入した後、事例で取り上げた傷病について、学校現場における注意点を載せ、その観点を生かした実際の対応を学生が記入したものと同一形式で記載し、比較検討ができるようにしたものである（図1-4）。

実習ハンドブックに用いた事例は、①学校で起こりうる傷病を想定する、②学生が対応を思考し、記録する用紙は、養護活動のプロセスを意識した対応が考えられるような項目立てとする、③注意事項は学校現場ならではの注意事項を、＜発生機序＞、＜観察事項・アセスメント＞、＜処置＞、＜保健指導＞、＜連携・その他＞の項目に分類し、明示する、④実際の対応の見本を、学生の記録する用紙と同じ形式で明示する、

表1 養護実習分析記入例

実習項目			講話				観察見学				参加				実施			
			テオリシエン	1週目	2週目	3週目	テオリシエン	1週目	2週目	3週目	テオリシエン	1週目	2週目	3週目	テオリシエン	1週目	2週目	3週目
組織・運営	学校運営	学校運営	3	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		学校行事	3	5	0	0	0	2	0	0	0	1	2	2	0	1	2	0
		学級経営	2	7	0	0	0	4	0	0	0	4	0	0	0	4	0	0
		チーム学校の理念に基づいた学校づくり	3	3	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		インクルーシブ教育システムに基づいた学校づくり	3	4	0	3	0	2	0	3	0	0	0	3	0	0	0	2
	学校保健	学校保健計画の立案、計画・実施状況について	3	7	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	2	2
		学校保健計画とPDCAサイクルに基づいた学校保健の実施	3	5	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ヘルスプロモーションに基づいた学校保健の実施	3	5	0	0	0	1	3	0	0	0	3	0	0	0	3	0
	学校安全	学校安全計画の立案、計画・実施状況について	3	7	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
		学校保健情報の把握	3	7	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	健康課題の把握	健康調査の計画と実施	3	5	0	0	0	3	0	0	0	1	3	0	0	1	2	1
		健康観察の計画と実施	3	7	0	0	0	7	3	0	0	3	5	0	0	2	5	1
		健康課題の把握	3	7	0	0	0	6	4	0	0	5	3	0	1	5	3	0

の4点を意識し作成した。また、事例提示に使用する写真等はできるだけ実際の事例に基づいたものにするため、附属校のケースのものを使用した。

Case 1

対象：小学校3年生、男子（A太）
受傷日時：4月20日（水）13：00

【受傷に至る経緯】
昼休みに、朝から降っていた雨が上がったので、A太はグラウンドで、同級生3人とサッカーをして遊んでいた。友達の一人がボールを高く上げ、そのボールを取ろうとA太はボールを見ながら追いかけた。その時、同じくボールを追いかけていた別のB男と接触して転倒した。
その際、A太は右膝を地面で擦った。本人は「痛い！」と言い、泣きだした。近くにいた教員が保健室に連れてきた。養護教諭がA太に、「どうしたの？」と聞くと、A太は「サッカーをしていて友達とぶつかって、転んだんだ。」と返答した。さらに、「B男がこっちに来るから悪いんだ！B男のバカ！」と転んだことをB男のせいにして、養護教諭がA太の右膝を見ると、砂や泥にまみれた状態で、その間から出血していた。砂や泥が付いているため、深さはよく見えない。傷の範囲は4×5cm程度である。

【その他の情報】
反対側の膝には数日前に貼った絆創膏がそのままになっている。
保護者は、共働きで日中は不在である。ただし、連絡を取ろうと思えば連絡がつく。





養護教諭として、どのような対応をしますか。
観察事項とアセスメント結果、処置を記入しましょう。

図1 実習ハンドブックの一例（事例）

Case：

学生番号：

氏名：

【考えられる対応】

観察事項・アセスメント結果

S 主観的情報（主訴）
O 客観的情報に分けて記入する。

	観察事項	アセスメント結果
身体的アセスメント	S O	
心理的アセスメント	S O	
社会的アセスメント	S O	
生活習慣（環境）アセスメント	S O	

対応（処置・保健指導・その他）

【処置】

・保健室において、落ち着くように声掛けをしながら、流水で汚れを取り除いた。
・感染の可能性があるため、できるだけ傷口をきれいにした。
・傷の大きさに応じた被覆材で覆い、すぐにはがれないように工夫した。（図1）

【保健指導】

・傷口を洗ってから入室するよう伝えた。
・グラウンドのコンディションなど周囲の状況を考えて遊ぶよう指導した。
・保健室では継続した処置はないので、傷口の状態を毎日観察し、家庭で処置を行うよう指導した。
・痛みが引かない、赤く腫れた、化膿したなどの場合は早めに受診する。
・入浴時の注意事項と家での処置方法を伝えた。

【連携・その他】

図2 実習ハンドブックの一例（学生記入ワークシート）

Case 1 擦過傷【学校現場における注意事項】

<発生機序について>
擦過傷（すり傷）とは、摩擦による損傷で皮膚の表皮のレベルにしか達していないもの。外的、内的要因によっておこる体表組織の物理的な損傷。

<観察事項・アセスメントについて>

- ・小学生の服装は半そで半ズボンが多いため、肘、膝、手のひらなどの擦過傷が多い。
- ・受傷した場所（校庭・体育館）の材質によって、擦過傷の状態が異なることが多い。（例：人工芝やゴム引きのグラウンドの場合は熱傷様の傷。）
- ・以下の項目を観察する

傷の大きさ・深さ、砂や泥などの異物の有無、出血の状態、受傷した場所（校庭、体育館、汚泥の場所など）、周囲の関節の可動範囲、他部位の損傷の有無

<処置について>

- ・受傷部位と損傷の程度を確認する
- ・受傷部位を水道水で十分に洗浄する
- ・被覆材で保護する

<保健指導について>

- ・入室前に、受傷部位をよく洗ってくるように指導する。（けがの手当てをしてくれる大人がいない時も、自分で対処できるようになるためにも必要である。）

※帰宅後、以下の注意すべき点について指導する。

- ・保護者に報告すること。洗浄や被覆材の交換をすること。感染の兆候を伝え、感染の兆候が見られる場合は受診する必要があること等
- ・受診しない場合は経過を追い、傷口の状態の観察を継続する必要があること。

<連携・その他について>

- ・担任に保護者への連絡を依頼する。・受診するようであれば日本スポーツ振興センターの書類を渡す。

（受診のめやす）

- ・受傷範囲が広い、または、深くて出血量が多い
- ・洗浄後も泥や土などが残り、化膿などの可能性がある
- ・数日経過しても受傷部位の痛みが強い、赤く腫れる、熱をもつ、膿が出てくるなど、感染の兆候が見られる場合。




図1 ガーゼ保護例（中学生）

図3 実習ハンドブックの一例（学校現場における注意事項）

Case 1 擦過傷【実際の対応】

観察事項・アセスメント結果

S 主観的情報（主訴）
O 客観的情報に分けて記入する。

	観察事項	アセスメント
身体的アセスメント	S：「痛い！」「サッカーをしていて友達とぶつかって 転んだんだ。」 O：右膝がすれて出血している。傷の範囲は4×5cm程度である。傷口は砂や泥で汚れている。	右膝擦過傷 感染（破傷風含め）の可能性あり 汚れが取り切れない場合は医療機関の受診を検討する必要がある。
心理的アセスメント	S：「痛い！」 O：泣き出した。 傷口がそのままの状態であらした。	強い痛みを感じている。 痛みが強い可能性がある。 擦り傷の初期対応について知らない可能性がある。
社会的アセスメント	S：「B男がこっちに来るから悪いんだ！B男のバカ！」 O：転んだことをB男のせいにして	A太とB男の間に力関係が生じている可能性有
生活習慣（環境）アセスメント	S： O：反対側の膝には数日前に貼った絆創膏がそのままになっている。	学級担任に、前回のケガも併せて報告し、保護者への連絡方法を確認する（電話か連絡帳か、など）

対応（処置・保健指導・その他）

【処置】

・保健室において、落ち着くように声掛けをしながら、流水で汚れを取り除いた。
・感染の可能性があるため、できるだけ傷口をきれいにした。
・傷の大きさに応じた被覆材で覆い、すぐにはがれないように工夫した。（図1）

【保健指導】

・傷口を洗ってから入室するよう伝えた。
・グラウンドのコンディションなど周囲の状況を考えて遊ぶよう指導した。
・保健室では継続した処置はないので、傷口の状態を毎日観察し、家庭で処置を行うよう指導した。
・痛みが引かない、赤く腫れた、化膿したなどの場合は早めに受診する。
・入浴時の注意事項と家での処置方法を伝えた。

【連携・その他】

・傷の程度を伝え、担任にケガの経緯を確認してもらった。
・接触した子のケガの有無を確認してもらった。
・家庭環境の情報収集を担任から行った。
・家庭への連絡方法を担任と相談した。
・その後の経過報告をするよう担任に依頼した。
・ケガをしたのはB男のせいではないことをきちんと説明し、納得してもらおうとする。

図4 実習ハンドブックの一例（実際の対応の見本）

この実習ハンドブックと同様の内容をデジタル教材とし、以下の環境を用いて使用した。

【デジタル教材活用環境】

授業内の環境：大学内Wi-Fiによるインターネット
 タブレット：3～4人に1台
 教育SNS：Edmodo
 使用テキスト：PowerPoint

デジタル教材使用後、教材が役に立つと思うか、教材で使用する事例で扱ってほしい内容、授業での学びや授業後の意識の変化、教育用SNSを活用した学習について、教育用SNSやタブレットを今後どのように活用できると思うか、等について質問紙調査を実施した。

2. 4 分析方法

2. 4. 1 養護実習分析

分析方法は全64項目の実習項目を、「学校全体の組織・運営」の項目と、養護教諭の職務である、「保健管理」、「保健教育」、「健康相談活動」、「保健室経営」、「保健組織活動」の計6項目に大別し、受けた日付をオリエンテーション、第1週目、第2週目、第3週目に分類し、受けた日付けの記載のある項目を1とカウントし、受けた形態ごとにすべての実習生のカウント数を集計し、分析した。

2. 4. 2 教材開発

質問紙調査で得られた結果を、集計及びユーザーローカルテキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp/>) を用いた分析を行った。

2. 5 倫理的配慮

本研究の調査にあたり、対象者には、趣旨を説明し、了解を得たうえで実施した。回答にあたっては、個人が特定されないよう配慮し、本研究の目的以外には使用しない旨説明した。

また、本研究は、東京学芸大学倫理委員会の審査、承認（受付番号299）を受けて実施した。

3. 分析結果

3. 1 養護実習分析

実習項目について、大別した6項目を、受けた形態ごとにまとめた（表2-5 図5-8）。

表2 養護実習時期（講話）

実習項目	オリエンテーション	1週目	2週目	3週目
組織・運営	38	74	0	3
保健管理	38	74	0	3
保健教育	17	150	19	2
健康相談活動	27	58	6	0
保健室経営	11	29	0	0
保健組織活動	22	59	2	0

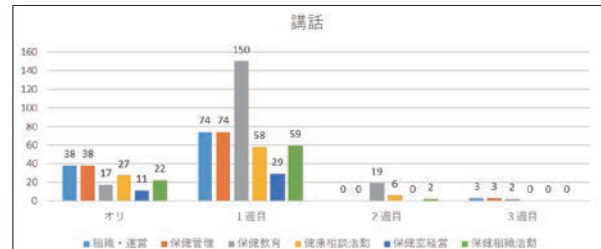


図5 養護実習実施時期（講話）

表3 養護実習実施時期（観察見学）

実習項目	オリエンテーション	1週目	2週目	3週目
組織・運営	1	33	10	4
保健管理	1	33	10	4
保健教育	2	81	40	15
健康相談活動	3	26	18	12
保健室経営	0	29	5	5
保健組織活動	0	34	17	11

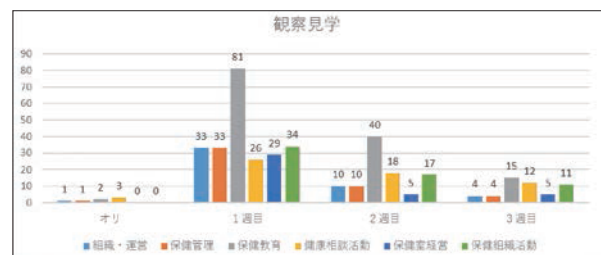


図6 養護実習実施時期（観察見学）

表4 養護実習実施時期（参加）

実習項目	オリエンテーション	1週目	2週目	3週目
組織・運営	0	14	16	6
保健管理	0	14	16	6
保健教育	0	64	35	14
健康相談活動	2	18	13	15
保健室経営	0	4	10	8
保健組織活動	0	4	19	14

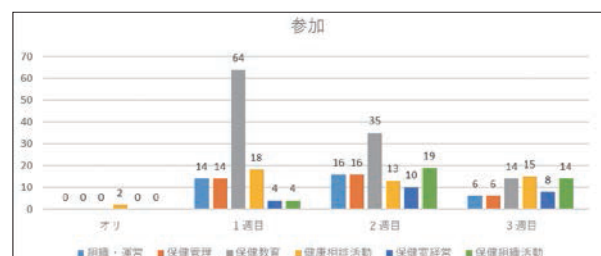


図7 養護実習実施時期（参加）

表5 養護實習実施時期（実施）

実習項目	オリエン テーション	1 週目	2 週目	3 週目
組織・運営	1	13	17	6
保健管理	1	13	17	6
保健教育	0	52	30	28
健康相談活動	2	11	18	18
保健室経営	0	4	8	6
保健組織活動	0	2	15	12

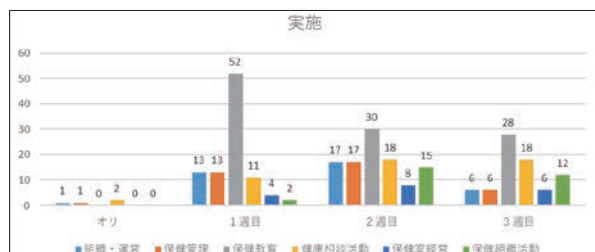


図8 養護実習実態時期（実施）

3. 2 教材開発

3. 2. 1 テキスト（実習ハンドブック及びデジタル教材）の使用について

授業で使用した教材について、「役に立つと思う」、「役に立つかわからない」「役に立たないと思う」の3択より選択してもらい、集計した(図9)。

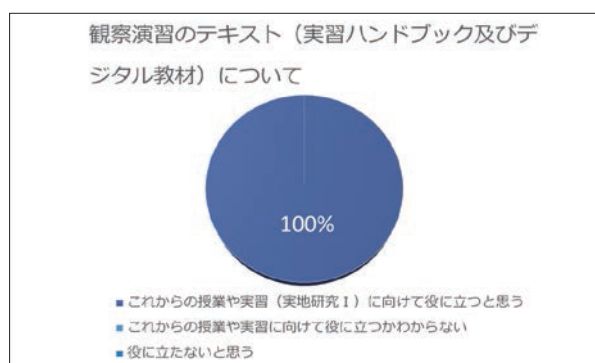


図9 授業で使ったテキストの有用性について

3. 2. 2 教育SNSの利用について

今回使用した教育SNSについて、どのように思うか、
選択肢より1つ選択した（図10）。

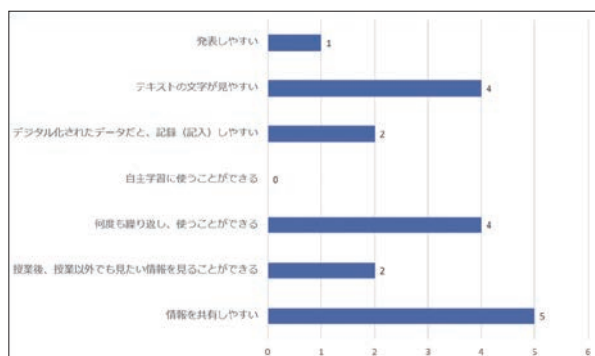


図10 教育SNSの利用について

3. 2. 3 実習に対する意識の変化

授業を受ける前に比べ養護実習に対しての自分自身の意識がどのように変化したと思うか、自由に記述してもらった内容を、テキストマイニングのワードクラウド分析を用いて図示した(図11)。ワードクラウド分析では、出現回数の高い単語を、その値に応じた大きさと図示することができる。単語の色は品詞の種類により、青が名詞、赤が動詞、緑が形容詞で表されている。

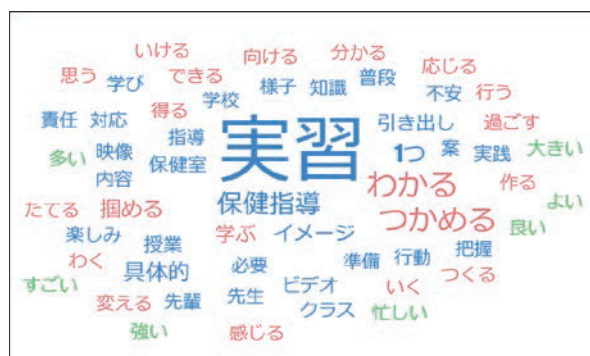


図 11 実習後の実習に対する意識の変化（ワードクラウド）

次に、同じ記述内容を、共起キーワードで示した(図12)。共起キーワードとは、文集中に出現する単語の出現パターンが似たものを線で結んだ図である。出現数が多い語ほど大きく、また共起の程度が強いほど、太い線で描画される。

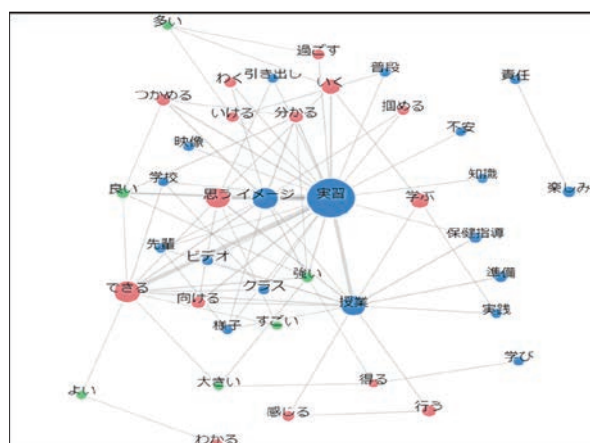


図12 実習後の実習に対する意識の変化（共起キーワード）

3. 2. 4 養護実習に向けてこれから必要と考える 学び

養護実習に向けて、これからの自分に必要な学びは何か、自由に記述してもらった内容を、テキストマイニングのワードクラウド分析を用いて図時した（図13）。

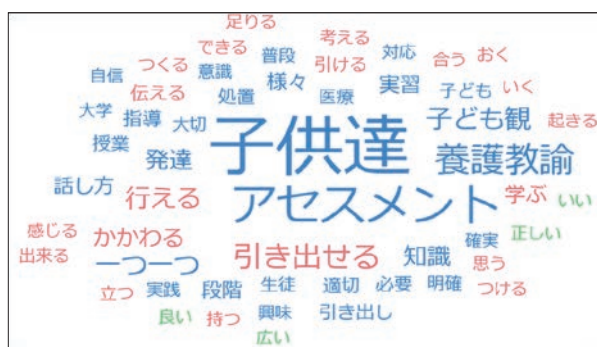


図13 これから必要な学び（ワードクラウド）

次に、同じ記述内容を、共起キーワードで示した(図14)。

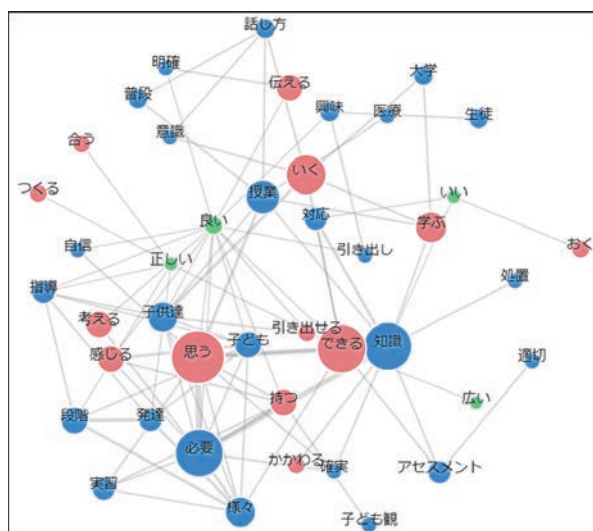


図14 これから必要な学び（共起キーワード）

4. 考察

4. 1 養護實習分析

養護実習をその形態ごとに分析した結果、オリエンテーリング以外の全ての週で、保健教育の項目が多く実施されていることが明らかになった。保健教育には、個別または集団の保健指導と、授業として行う保健学習が含まれているためと思われる。他学科の学生は、自分の専門の教科の授業研究に教育実習の重点を置いていると同様、養護実習においても、保健教育にその準備も含めかなりのウエイトを置いていることが明らかになった。

次に、それぞれの形態ごとに実習のどの時期にどのような項目が重点的に行われているかを見ると、「講話」は、オリエンテーションから第1週までに実施されることが多く、「観察見学」は第1週にかなりの頻度で実施され、その後徐々に減少していくことが明らかになった。「参加」は、実習中は保健教育を除きどの項目でも1-3週に亘って同程度実施されており、「実施」は、2週目から3週目にかけて多く実施され、

保健教育以外は2週目に実施される項目が多く見られた。

これらのことから、養護実習は、「講話」のような比較的受動的な形態から、徐々に自分自身で実施するより能動的な形態へと移っていくが、実習の3週目は養護実習全体としてのまとめとなるため、実際に実施する項目は2週目に多く行われていることが明らかになった。学生が養護実習からより多く学ぶためにも、このような形態で実習が進んでいくことを事前指導で紹介し、学生自身が実習の前半・中盤・後半に、何に重点を置いて活動していくべきか、実習前に考えさせておく必要があると思われる。実習の前半は受動的な活動が多いが、それをただ受動的に受けているだけではなく、そうした時期に、その後に予定されているより能動的な活動のために、観察したり、準備をしたりするという姿勢で臨むことが学生には求められており、そうした姿勢で臨むことができるよう事前に意識付けを行う必要がある。

4. 2 教材開発

4. 2. 1 教材開発に当たって

作成したデジタル教材は、Edmodoという教育SNSを用いて使用した。Edmodoは教育に特化したソーシャルプラットフォームで、Edmodo上で意見や解答を投稿し、クラス全体でリアルタイムに共有することができたり、Microsoft Officeと連携したりすることによってOffice上で作成した動画や資料をEdmodoに投稿することによって簡単に共有することができる教育SNSである。授業の際には、グループに分かれ、タブレットに送られたケースを見ながら、各自、実習ハンドブックに記述し、その後グループで討議した結果をタブレット上のワークシートに記入（タブレット用のペンを使用）して返信し、授業者のところに集約された内容を、タブレットで全員が見ながら情報共有を行った（写真1）。各グループで検討して返信した結果は、記録として残り、事後学習にも使用することができる。



写真1 デジタル教材を使用した学習の様子

4. 2. 2 テキスト（実習ハンドブック及びデジタル教材）及び教育SNSの使用について

授業で活用した実習ハンドブックやデジタル教材などのテキストについては、役に立つと思うとの回答が100%であった。

また教育SNSの利用については、「情報を共有しやすい」と回答したものが多く、デジタル教材と教育SNSの利点について、特に情報共有ができるという面で効果を実感していることが明らかになった。しかし、自主学習に使用できると回答したものがなく、自主学習のために、デジタル教材と教育SNSをどのように活用できるのか等の学習方法の指導が不十分であったことが明らかになった。今後は、活用の仕方について、iPadやPCで教育SNSを使用する方法（ICT機器使用のリテラシー）も高めていく必要がある。

4. 2. 3 実習に対する意識の変化

実習に対する意識の変化についてワードクラウド分析を行ったところ、「実習」の語の頻度が高く、実習への意識が高まったことが明らかとなった。共起キーワード分析を見ても、「実習」という語が、「イメージ」や「思う」という語と強く結びついていた。授業を通して、より実習をイメージすることができるようになったことの表れと考えられる。教職課程コアカリキュラムの教育実習の項目の事前指導では、教育実習生として学校の教育活動に参画する意識を高める⁴⁾ことを目標としているが、養護実習でも同様の目標を持って指導に当たる必要があると思われる。デジタル教材を使用した指導の結果、学生の実習に対する意識が高まったことは、デジタル教材の有用性を示すと考えられる。

4. 2. 4 養護実習に向けてこれから必要と考える学び

養護実習に向けてこれから必要と考える学びについてワードクラウド分析を行ったところ、「子供達」の語の頻度が高く、子供を知る必要性をより強く感じたことが明らかになった。また、「アセスメント」という語の頻度も高かったが、これは、デジタル教材がけがの対応について考えるものだったため、けがの種類やその緊急度・重症度を見立てる、いわゆるアセスメントについてその必要性を痛感した学生が多くなったためと思われる。

学校における救急処置の中心となる養護教諭には、発生した傷病に対して、症状の的確な見極めと医療機関などへの受診の有無を含め、総合的に判断し対応することが求められる。さらに判断する際には、緊急度・重症度の判断を的確に行うことが求められている⁵⁾。このため、養護教諭を目指す学生にとってもアセスメントの必要性を今のうちから認識し、今後の学びにおいてアセスメントを意識するためにも、今回の学習が良い意識付けとなっていた。

また共起キーワード分析を見ると、「知識」の必要性を強く感じたことが明らかになった。

教職課程コアカリキュラムの教育実習の項目の、教育実習校の理解に関する事項には、教育実習校（園）の幼児、児童又は生徒の実態とこれを踏まえた学校経営及び教育活動の特色を理解する⁵⁾ことを目標としている⁴⁾。また、齋藤らは養護実習における学生の学びの要素を抽出し、学生が養護実習を通じて、【子ども観・健康観の広がり】、【養護教諭の職務・役割の理解】を得ていたこと⁶⁾を明らかにしており、実際の養護実習において子供観を含めた子供理解が深まることが明らかとなっている。そのため、養護実習までに子供理解について意識しておくことは、養護実習において学びを深めるためにも重要である。

また、知識の必要性については、デジタル教材で事例に基づいた対応を学習する中で、実際に子供のけがなどに対応するには、現時点の自分自身の知識が不十分であることを痛感したのではないと思われる。飯島は、養護実習終了後のレポート分析より学生の救急処置における学習課題を明らかにしたが、その中で、養護実習で学んだこととして、養護教諭としての適切な判断を行うため判断基準となる根拠を持つこと、そのための知識を得ることの必要性⁷⁾について言及している。実習前にこのようなことを意識し、大学での学びを深めておくことは、養護実習での充実した学びにつながると思われる。

ただ、傷病の知識を学ぶだけでなく、具体的な事例を通してその対応を考え、他のグループの意見を同時に情報共有しながら学ぶ方法は、知識の必要性に加え、知識をうまく活用して実際は対応していかなければならないことを意識させ、知識の獲得だけでなくその活用についても今後の学びで意識していくことができる。

4. 3 課題と今後の展望

養護実習分析は、対象校が4校、対象者が10名と、対象が少ない。また、教材開発の評価のための質問紙調査も対象者が12名と少ない。そのため、この結果をもってすべての養護実習の実態や、デジタル教材の有用性を示すとは言えない。本大学は、附属校が12校園有り、その中でも養護実習を受け入れている小中学校は、7校ある。毎年受け入れ校も変わるため、さらに調査を続け、附属校としての養護実習分析をさらに続けていく必要がある。また、附属校だけでなく、養護実習の協力校である公立学校等における養護実習分析を行うことで、附属校との共通点や相違点など明らかにし、養護実習の具体的内容について精査していく必要性がある。

また、開発した教材について、養護教諭養成の他大学の学生も対象者に加え、その有用性について調査を進める必要がある。今後は、養護実習分析結果を踏まえた養護実習のモデルプランの作成、実習ハンドブックとデジタル教材の内容について、けが等の外科的事例だけでなく、内科的事例や、その他保健管理や健康相談など多岐にわたる養護教諭の職務に合わせた内容も作成し、養護実習前後の学習に活かしていきたい。

5. 付記

本研究は、平成30年度「特別開発研究プロジェクト」「大学と附属学校の連携による体系的な養護実習モデルプランの作成並びにICT教育コンテンツの作成と検証」(研究代表者: 荒川雅子)の一貫として共同で遂行、執筆された研究成果の一部である。

6. 文献

- 1) 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会: 教職課程コアカリキュラム, p.1, 2017
- 2) 中央教育審議会: これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い, 高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申), p.17, 2015
- 3) 中央教育審議会: これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い, 高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申), pp.38-40, 2015
- 4) 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会: 教職課程コアカリキュラム, p.29, 2017
- 5) 松野智子, 加藤啓一: 養護教諭のための救急処置: 第3版, pp.8-9, 東京(少年写真新聞社), 2016
- 6) 齋藤千景, 竹鼻ゆかり: 養護実習における学生の学びの要素, 東京学芸大学紀要. 芸術・スポーツ科学系 Vol.70, pp.177-183, 2018
- 7) 飯嶋亮子: 養護教諭養成における救急処置能力の教育課題, 教職研究(東北福祉大学教職課程支援室), 2017巻, pp.1-9, 2018